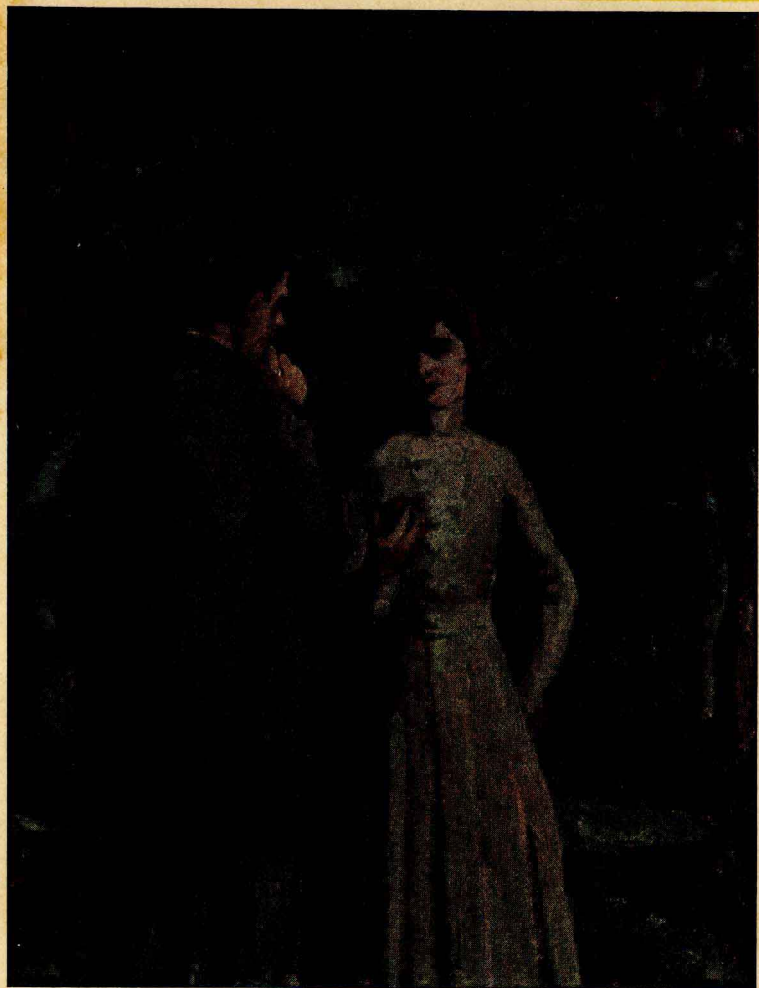




**BERÄTTELSE
OCH
DRAMER**

August Strindberg

著リベドンリトス

他其 踏舞の死。白告の人痴

譯 彌 光 井 三



版 出 社 潮 新

非賣品

世界文學全集(28)

痴人の告白
死の舞踏

— 其他

第二十一回配本

昭和三年十一月十日印刷
昭和三年十一月二十日發行

翻譯者 三井光彌

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

解 説

一、『痴人の告白』

「これは確に恐しい書物である。私は少しの異議もなくこの事を認めてゐる。私は今日になつては、こんな物を書いてしまつた事を裏心から悔恨してゐる位である。」と著者自ら緒言に述べて居り、且つ彼の第二、第三の結婚の破綻の原因となつたときへ云はれるこの書は、汎く知られてゐるやうに、ストリンダベリの第一の結婚生活の顛末の最も正直大膽な告白であり、世にも稀なる自己暴露と自己苛責の、凄惨な人生記録である。

それは一般に『女中の子』『地獄』その他と共に、彼の一群の「自傳的小説」の中に入れられ、著者自らも屢々これを小説と稱してはゐるが、實は小説的作爲や潤色は甚だ少く、純然たる自叙傳と稱して少しも差支への無いものである。

然し元來小説の形式を以て書かれ、且つその中には個人的祕密が遠慮なく暴露せられてゐるので、人物の名はすべて本名を避けて假名が用ゐられてゐる。主人公なる私(アクセルといふ名になつてゐる)は、云ふまでもなくストリンダベリ自身で、當時ストックホルム王室圖書館の助手であつた彼が、一八七五年二十六歳の春五月、この有名な結婚悲劇の女主人公となつたマリヤに初めてめぐり會つた時、彼女は彼より一つ年下の二十五歳であつた。書中のマリヤの實名は Siri von Essen といひ、芬蘭の陸軍大尉エッセン男爵の娘で、三年前に瑞典の近衛聯隊の大尉 K. G. Wrangel 男爵(この書の中ではグスタヴ)と結婚し、二人の間には當時二歳になる女の兒があつた。

この『告白』の中に物語られてゐる事件は、一八七五年の春から八七年の秋まで十三年間に亘つてゐるが、主なる事

件の年代と主人公ストリンドベリの當時の年齢とを一見明かにする爲めに、左に各部の年代を掲げて置く。

第一部。一八七五年(ストリンドベリ二十六歳)五月より翌七六年五月マリアの家出に至るまでの一ヶ年間。

第二部。一八七六年(二十七歳)五月より翌七七年十二月三十日二人が結婚式を擧ぐるまで。

第三部。一八七八年(二十九歳)の結婚生活第一年より八三年九月故國を出て、佛蘭西へ赴くまでの六年間。

第四部。一八八三年(三十四歳)九月より八七年秋に至るまで四年間の外國流浪の時代、

ストリンドベリがこの『告白』を書くやうになつた當面の目的については、*Le Plaidoyer d'un Fou* (或る狂人、或は阿呆の辯明の意)といふ原題名が端的にこれを語つてゐる。故にこれは、その英獨譯やそれに倣つた邦譯で通用してゐるやうな、單に回顧的な「告白」や「懺悔」では無くして、多分に攻勢的な辯解であり、抗議であり、復讐の手段でさへもあつた。即ち、その序曲や本文の各所に縷々と陳述せられてゐる如く、彼の妻シリとその先夫との離婚に際しての彼の立場や、その後彼が彼女と共に始めた結婚生活及びその破綻に至るまでの事情や彼の責任に就いて、彼は世人の不當なる誤解と忍び難き冤罪とを受けてゐると信じてゐた。この點に於ては餘りに小心で神經過敏にさへ見えるストリンドベリは、妻の持參金をどうしたとかいふやうな問題にまで立入つて、細々しく辯解釋明して自己の立場を擁護しなければ止まなかつた。

然しかうした幾分の女々しい云ひ譯や繰言を並べるだけが、この『告白』を書いた動機で無かつた事は云ふまでも無い。然らばもつと内面的な眞の目的と動機は何か? ——

「一體何に因つてこの書は生れ出でたのか? 私は自分の屍を永遠に柩の中に閉ぢ籠めて葬つてしまふ前に、先づそれをきれいに洗ひ淨めなければならぬといふ、當然な必要を感じたのである。」(緒言)

「私は何でもかまはないから確實な物を掴つかみたい。それで無ければいつそ死ぬ方がましだ！……妻に欺かれたる夫となる——そんな事がこのおれにとつて何の苦にならう、只それが確實に分つてさへゐれば！」（序曲）

以上のやうな彼自身の悲痛な言葉が何よりも明かにこれを説明してゐる。即ち彼は、その結婚地獄に於けるあらゆる受難の真相を白日の下にさらけ出して、今や不倶戴天の敵となつた彼の妻との間に總決算を付ける爲め、序曲の終りに列擧してゐるやうな色々の方法を盡し犯罪的手段にまで訴へた揚句、最後に藝術家としての本領に立歸つて、「彼女の罪惡に關する貴重なるノートを一つも洩さず蒐集し整理して、一篇の長篇小説を書き上げる」事によつて事件の真相を暗示するヒントと一切の謎を解く鍵を見出し（彼にとつて最大の關心事は、妻の貞操と彼の子供は果して自分自身の子なりやの二問題）、十餘年に亙るこの試練に鍛きたへられ淨きよめられたる彼自身の魂を救ひ出し、兼ねて當の相手に怨みの一太刀を浴びせようといふ悲壯なる決心を抱いて、この自傳の稿を起す事になつたのである。

扱て今『痴人の告白』が、作者の魂の内面的淨化といふやうな、純藝術的道義的な目的を達してゐるか否かの問題は暫く措き、彼にとつてもつと直接の實際問題であつたあの「辯明」の目的は、果してよく果されてゐるか否かに就いては頗る疑はしいものがある。何となればこの書の第二部以下に現れたる女主人公マリアの性格や行動は、第一部に於て餘りに憧憬的に美化せられたその反動として俄に幻滅の對象となり、恐しく歪ひがめられ戲畫化されてゐるので、著者が聲を大にして彼の所謂吸血鬼的悍婦のために蒙つた結婚受難に對する同情を讀者に要もとめてゐるにも拘らず、讀者はむしろ餘りに偏見的な著者の誇張と執念深さに反感を抱いて、却つて彼の敵なる彼女の方に同情したくさへなるからである。そして實際に於ても、彼女は決してこの書の中に無残にも醜惡化せられてゐるやうな悍婦や淫婦では無かつた事だけは明かな事實である。

さういふとストリンドベリはいかにも卑怯卑劣な嘔吐きのやうに聞えるが、彼は決して意識的にさうした嘔吐を吐いたり中傷したりしてゐるのでは無くて、少くともこの『告白』を書いてゐた時分の彼は、マリアが稀代の悍婦にして淫婦（然も變態的な）なる事を疑はず、彼自身をば世にもあはれむべきその犠牲として、「絞り棄てられたるレモンのから」として確信してゐた事は、この書のあらゆる頁の表に滲み出してゐる彼の涙の痕によつて明かであらう。つまり逆説的に云へば、ストリンドベリはこの『告白』に於て、最も正直に最もひどい嘔吐を吐いたといふ、頗る皮肉な結果に到達してゐるのである。

然らば一體どうしてそんな變な事になつたのか？ 簡単に云つてしまへば、ストリンドベリは一種の精神病患者であつた爲めに、さうした歪んだ物の見方をする事になつたのに他ならない。それは、彼の妹エリザベートが立派な精神病患者であつたといふやうな先天的素質にもよるだらうし、又後天的な境遇の影響にもよるだらう。兎も角彼が青年時代以來屢々病的な幻覺に悩まされたり脅迫観念的發作に襲はれたりして突飛な行動に出でた事があるのは疑なき事實で、現にこの書の第一部第七章には、「自分は少くとも短時間病的な精神障礙に陥る事があるといふ確信に到達せざるを得なかつた。」と自認してゐる。或る醫學者は彼の精神狀態をバラノニアの一種と診斷し、或は又精神分析學的にアングスト・ヒステリーとも名付けてゐる。我が羽太博士も、「彼の精神作用は明かに病的な定型を經過してゐる。」と云つて、その精神病患者たる事を疑つてゐない。そして彼の第一の結婚生活の時代は、かの『地獄』の時代（年表参照）と共に、彼の生涯中でもかうした病的傾向の最も著しかつた時代に屬する事を思へば、この書に現れてゐるやうな、妻に對する極端な猜忌や嫉妬や、愛と憎、渴仰と幻滅との兩極端的轉換や、脅迫観念的恐怖（妻は自分に毒を盛らうとしてゐると眞面目に信じてゐた如き）等は、少しも不思議では無くなるだらう。但しこの際誤り考へてはならないのは

かうした病的傾向は古來の天才によく見られるもので、ストリンドベリの藝術家としての價值に何等の影響を及ぼすものでないといふことである。たとへば、甚だ紳士的、常識的な人間の如くに思はれてゐる夏目漱石でさへ、未亡人の思ひ出話によると、或る時期に於ては、程度の差こそあれ、彼と非常によく似た病的傾向を多分に持つてゐたらしい。

のみならず、我々がこの『告白』に求めるものは、決して客觀的に正確な事實の記録ではないので、一度この「天才の錯覺」とも云ふべきものを大目に見れば、如何に彼が灼くが如き情熱を以てしかも敬虔に愛し、愛するが故に深刻に憎み、その憎みの故に如何に眞剣に悩み迷へるかの一切を告白し、解剖して、云はゞ姐上に横へたる赤裸の自己の肉體に磨ぎましたる冷たいメスを加へて、甘んじて人類の淨化と訓誡の爲めの犠牲となつたその眞摯な態度には胸をうたれる。この『告白』が古今に類を絶する告白文學として推賞せられる所以は全くそこにある。

女主人公シリに就いて一言すれば、彼女が貞淑溫順の模範的賢夫人では無いまでも、この書に發き出されてゐるやうなひどい女では無くして、随分しつかりした婦人であつた事は多くの人々の認めるところで、ストリンドベリ自身でさへ、離縁後の彼女の健氣な子女の養育振りに感じて屢々彼女に金を送り、且つ『告白』の後十五年に書かれた『ダマスクス』第三部に於ては、曾て彼女に冤罪の濡れ衣を被せた我が罪を懺悔してゐる。彼女が一九一二年四月二十日、先夫ストリンドベリの死に僅か二十三日を先立つのみにして病死したのも不思議な因縁であつた。

『痴人の告白』の起稿せられたのは結婚後滿十年に近き一八八七年、著者三十八歳の秋九月で、大部分は丁抹に於て書き上げられ、翌年三月に脱稿した。その内容が内容だけに彼は母國語で書かずに佛語で書き、且つ自分の生きてゐる間は絶対にこれを發表しないつもりでゐたのであるが、どうした間違ひか、その後五年を経た一八九三年に著者の承

認を經ない杜撰な『告白』の獨語譯が突如伯林で出版された。それだけでも彼にとつては大きな迷惑であつたのに、おまけにこの書の内容が風俗を紊すものとして普魯西の檢事に起訴せられて書籍は沒收せられたが、原著者の處刑だけは辛うじて免れた。その後種々の經緯を経て一八九五年に至つて佛語原本は巴里のアルベール・ランカン書肆から出版せられたが、瑞典語譯の出版だけは遂に著者に許可せられず、彼の死後初めて全集の一冊となつて出た。(佛語の原本は僅少部數の初版限りで絶版になつた爲めに容易に手に入れ難い珍本となつたが、譯者は幸ひにして、恐らく現在日本に存する唯一部だらうと思はれるこの本を、西田正一氏の好意により長期間拜借して原文からの直接譯を茲に初めて公にする事が出来たのは、譯者の大なる喜びであつて、同氏への満腔の感謝を捧げる。)

『告白』の最初の獨譯版が出た時に普魯西の官憲が抱いたやうな謬見を持つ人が、讀者の中に萬一にも有らうかと、一言茲に釋明して置くのも無益ではあるまい。この書は何分その題材から見ると、前半の第一部では四角關係とも云ふべき複雑な姦通事件が取扱はれて居り、第二部以下では、著者は大膽にも彼等夫妻の閨房の祕事までも窺ふ事を讀者に許してゐるのみか、彼の見たる女主人公の放恣極まる、然も變態的な性生活が一々具體的に描寫せられてゐるので、皮相な見解から、結婚の神聖を瀆す不徳亂倫の書として非難せられるのも、あながち無理とは云へない。然しそれは、一面に於て自然科学の熱心な探究者でもあつたストリンドベリが、その特有の解剖癖と露出癖とを以て、面を反けなければならぬやうな醜穢な人事の暗黒面をも厭はず、心理的といふよりもむしろ生理的病理的にさへ徹底的に抉り廻さなければ氣のすまない、大膽な暴露的手法と表現の罪であつて、よくその内容に立ち入つて觀察すると、「結婚の冒瀆者」どころか、實は、人類の最も基本的な結合なる「結婚」といふ制度に對して、彼くらゐの敬虔で小心翼翼たりし人間は少いのである。この點に於て『告白』の第一部は、人妻への抑へ難き憧憬と情熱に耽き苦みながらも姦通

といふ罪の空恐しさに恐れ戦く弱き魂の、痛ましき呻吟の聲に他ならない。何となれば、彼の考へによると、夫と妻とその子等から成る一家族といふものは、「相互に密接に癒着せる血管の一體系」であり、「唯一つの生命に息づく、生ける有機體」である故に、その一部を切斷しても、その傷口からあらゆる血液が一時に流れ出して、縁につながるすべての人々はそのまゝ壊死する、その罪これより甚しきは無いからである。彼が十餘年の間彼の所謂悍婦の桎梏に喘ぎ悶えながら、然も思ひ切つて彼女から別れてしまふ事が出来なかつたのは、全くこの思想に支配せられてゐたからである。たゞ、妻の不貞行爲の確證を握り得たと信じなければならぬ羽目に至つて（それも例の迷ひではあつたが）、彼は斷然この『告白』の一篇を遺して離婚の決心を堅める事を餘儀なくされた。何故なれば、ストリンドベリになれば、人の妻たる者のかくの如き行爲は、家族の神聖な傳統と血統を汚し亂すものである故に、殺人以上に恐れなければならぬ大罪惡である。第一部に於ける主人公の懊惱が何故にあれ程までに凄慘を極めたかは、この見地よりして首肯する事が出来るだらう。

尙、結婚生活に於ては飽くまでも夫妻同等の自由と權利を保有すべきであるといふ信條を抱いてゐたストリンドベリは、その獨特の「近代結婚生活法」の實行を試みたことは本書の第三部に見る通りである。以上によつてストリンドベリは夫妻關係といふ事に就いてはむしろ堅苦しいまでに嚴肅な道義觀念を抱き且つこれに支配されてゐた人で、前記の如き非難は全然いへないものであつたといふ事だけは明かであらう。

最後に拙譯『痴人の告白』の卷末に附した附録に就いて一言すると、ストリンドベリから多大の信頼を受けてその獨譯全集の譯者となつた Emil Schering は、一九一〇年『告白』の獨譯本を出すにあつて、ストリンドベリの他の著作の中から二篇の詩と三つの短篇を選び出して、それを『告白』の第三部と第四部との四ヶ所に挿入した。私が直接に彼

に照會したところによると、『告白』の時代に出来たこれ等の詩文は原著者の承認を得て編入せられたものであるさうだし、且つこの四篇は、或は『告白』時代のストリンドベリの生活振りを説明し、或は本文の理解と鑑賞を助ける上に幾分の効果が有るだらうと思はれるので、特に附録としてこれを採用した。その中で一番長い『それだけでも十分では無いか?』といふ短篇小説は、ストリンドベリが一八八五年巴里滞在中この大都市の暗黒面を觀察し、貧しき者に同情の涙をそそいで書いた社會的諷刺小説で、藝術的にもすぐれてゐる。

二、『死の舞踏』

この戯曲と次の『罪また罪』の出来た時代は、ストリンドベリの所謂「地獄時代」(年表参照)に於ける、暴風の如き内面的葛藤と狂亂がやゝ静まつて、一度は神に背^{そむ}ける彼の胸に再び神は甦^{よみがへ}り、八十年代の自然主義的戯曲時代以後久しく衰へてゐた劇作力が再び旺盛になつた彼の五十歳前後に屬する。有名な三部曲『ダマスクス』を初めとして、浪漫的、象徴的な多くの童話劇や、大規模な史劇の傑作等は、すべて皆この數年間に書かれた。所謂自然主義時代のストリンドベリは、兎角物質的器械的な人生觀に捕はれて、宿命的な性格描寫と運命觀以外に出でなかつたが、この時代に至つてはもつと自由に、且つ内面的に深く物を見るやうになり、現實の底に徹して然も現實の境を超えたる、幽玄微妙な味の多くの作品を創^{つく}り出した。そこには、曾ては凄^しじくあれ狂つた暴風^{シネウール・ストランド}と殺^{ころ}す的反抗と懷疑の代りに、宗教的忍従と諦念の精神がほの見え、宥^{なだ}め難^{がた}かりし憎惡と呪詛(特に女性に對する)は柔らいで溫い愛と憧憬の微光がさし始めた。然しながら、本來彼の裡に生れ存する懷疑家、厭人家、反逆者はこの期に至つても勿論決して死滅してしまつたわけでは無く、暗澹たる『地獄』の時代を通過して憂鬱なるものは益々憂鬱に、この要素とかの要素と——明と暗、

靈と肉、菩提と煩惱、神と魔とが渾然融和して、そこに素晴らしい藝術境を展開するに至つた點に、この期のストーリーンドベリの特徴がある。

中にも『死の舞踏』(Dødsdansen 1901)は一般近代劇の典型として汎く認められてゐるのみならず、作者に於ても最も自信ある戯曲の一つで、彼がシェーリングに與へた書翰にはこれを「最も強き、最も簡素なる戯曲」或は「最も深刻なる戯曲」と自讃し、一九〇四年の手紙には明かに「我が最良の戯曲」と稱してゐる。

又、この曲の書き下し原稿にまだ表題を付けずにシェーリングへ送つた時には、「これは元來吸血鬼と名付けられる筈であつたのだが、云々」と云ひ、他の手紙には、「この中には精神生活の領域に於て新發見がある。(Vampirismus)」とも稱してゐるのを見ると、この曲に於ける作者の創作の興味も抱負も、一にかゝつて主人公の吸血鬼的性格の創造にあつた事が明かである。一體吸血鬼といふのは、希臘民族やスラヴ民族の間に流布してゐた一種の迷信で、人間の死後その亡魂が生ける人間に取憑いてその生血を吸ひ取り、遂に命を奪つてしまふといふ事が信ぜられてゐた。この曲の主人公エドガールが、一度この吸血鬼的本性を發揮するや、その犠牲として狙はれたクルトに、彼の生血を吸ひ上げる根を下して、周到な用意の下に一步步妻子財産地位等の一切を奪ひ去つて生ける屍となしてしまひ、己れ自身も瀕死の病人でありながら、その犠牲の血と肉とに飽いて、につと惡魔的な會心の笑を洩すところは、實に何とも云へない物凄さで、かうした特種の性格を創造しつゝ至つて自然に事を運んで、主人公をして樂々とその最後の目的を遂げしめるストーリーンドベリの手腕も亦すごいものである。

第一部に於ける主人公夫妻の、互に相憎み互に他の死を希ひつゝ然も別れてしまふ事も出來ぬ惡縁に繋がれながら、灰色の塔の結婚地獄に閉ち籠められてゐる有様は即ち、『痴人の告白』に於ける作者の第一の結婚生活そのまゝである

が、これだけでは讀者や觀客にとつて餘りに陰慘で、餘りに單調で、救はれない感じがする。そこで彼は第二部を書いた。第一部では、曾ては牢獄であつた灰色の塔の内部を舞臺にして、登場人物もたつた三人きりで、同じやうな動作が繰返へされるに過ぎないに反して（但しこの「繰返へされる事」その物が、作者の企圖した劇的效果の一つであつたらしい、第一部の大詰の註を参照）、第二部になると、白色と金色で装はれた明るい客間に若い男女が登場するので、舞臺がぐつと華やかになる。前者を薄暗く退屈な老人同士の結婚悲劇とすれば、これはほがらかで賑かな青春の戀愛悲劇として著しい對照を示す。ユーディトとアランとのあの純真可憐な戀の場面の水々しさといふものは、第一部を書いた響めつ面のストリンドベリの筆とは到底思へない位であるが、これは、後に彼の第三の妻となつた女優ハリエ・ボッセに對する溫い愛情が反映してゐるのだといふ。

『吸血鬼』の代りにこの曲の表題にされた『死の舞踏』といふのは、十五世紀以來歐洲に流行した畫題の一つで、死人を意味する骸骨共の輪舞、或は骸骨の形をとれる「死」に手を引かれた種々の階級及び年齢の人間共の輪舞を現し、ホルバインの木版畫は特に有名である。そしてこの二部曲に何故にこの題名が選ばれたかは、「恐らく死がやつて來る時にこそほんとうの生が始まるだらう。」といふ大尉の言葉や、第一部の各所に於て人生の究極を暗示してゐる「野菜畑と肥料車」の譬喩等が、これを説明してゐる。

三、『罪 また 罪』

一八九七年、丁抹の或る著作家がストリンドベリに向つて二十九ヶ條の質問を發して、その答へを求めた。その問答の中に左の二項がある。

貴下の想像し得る人間最大の幸福は何か？

答——一人の敵をも持たぬ事。

貴下は何を最大の不幸と思はるゝや？

答——心の平和と良心の安靜を缺く事。

右の事があつた翌年に起稿せられた『罪また罪』(Brott och brott 188-99)といふ戯曲は、即ち、この觀念の戲曲的表現に他ならない。この曲は神祕的な夢幻劇『待降節』と共に『上級裁判にて』といふ表題の一部の本にして出版せられた。何となれば、これ等の二曲は、『地獄』時代を通過した後のストリンドベリの贖罪者としての謙虚な姿を、ありのままに表現し、如何に罪に汚れたる魂と雖も、深刻な試練と受難を通過すれば淨められ救はれるといふ事を暗示してゐる點に於て全く姉妹曲と稱してもいいもので、『上級裁判にて』といふ綜合的題名は即ち、人の罪あると罪なきとは人間の作つた法律や道徳の物さしで計るべきでは無くて、より高き審判即ち彼自身の良心の聲と神のさばきの前に始めて決定せられるもので無ければならない事を意味する。この根本思想を中心として、『罪また罪』には凡そ人間の「罪」に關する一切の現象と問題が取扱はれてゐる。「人間の想像し得る最大の不幸」としての罪の意識の苛責の恐しさ、未だ意識せられざる罪の作用、個人の内部にのみ秘められてその魂を蝕む罪、罪の自覺に我れと我が身を苦むるのみならず、その結果醜き猜忌と嫉妬を生じて他人の魂をも殘忍に傷け、互に血みどろの淺ましい姿を暴露する凄慘さ(第四幕第一場に於けるモリスとアンリエット)、内心に他人の死を希祈するのみにて現實にその人の死を將來する罪の神祕性等、「罪」の本質と「罪」に關する人間心理の一切が、深く秘められたる隈々に至るまで餘すところなく白日の下に發き出されてゐる。

この曲は『死の舞踏』など、は反對に登場人物と筋の變化が多く、効果的な場面が多い爲めに、ストリンドベリの戯曲の中では最も屢々上演せられるものゝ一つで、我が樂地小劇場でも『爛醉』の名でこれ上演した事がある。

凡そストリンドベリの五十餘篇にも上る大小の戯曲の最も重要なテーマは云ふまでもなく性に關する問題であり、もう一つのそれは人間の罪及び贖罪の問題である。前者に於てはストリンドベリの、より人間的な煩惱の姿を見るべく、後者に於ては彼の宗教的精進の面影を偲ぶ事が出来る。そしてこの點に於て、前者の代表作なる『死の舞踏』と後者の代表作なる『罪また罪』の二曲を茲に併せ収める事が出来たのは、譯者の大きな喜びである。この二曲の拙譯は先に大正十五年『ストリンドベリ戯曲全集』の一冊として新潮社から出たものを、西田正一氏が一語一句綿密に瑞典語の原文と對照訂正してくられたので、今回は、原文からの直接譯と同様の正確さを自信し得るこの新譯を提供することが出来た。茲に明記して同氏に對する深甚の謝意を表する。

四、『結婚物語』

『結婚物語』(Giftas)が書かれたのは、『痴人の告白』第四部第一章に當る時代で、その執筆の動機に就いてもそこに詳しく(二二三、三頁參照)。また、これを公にして作者が筆禍を買った顛末は『告白』のこの章及び年表(一八八四年)で見られる通りである。茲には、作者が本國の法廷に立つ爲めに歸郷した時の市民の熱狂ぶりは、恰も凱旋將軍を迎ふる如くであつたといふ皮肉な事實を擧げて置くに止める。本譯書には、『結婚物語』の兩部を通じて三十篇の中から、種々の意味に於て代表的な六篇を選び、尙シェーリングが作者の他の集から彼の獨譯書へとり入れた『ロメオとユリア』といふ短篇をも加へた、『改良の試み』、『家族扶養者』の二篇には作者の體驗が豊富に含まれてゐる。

ストリンドベリ年表

一八四九年、アウグスト・ストリンドベリ(August Strindberg)は、ゲーテの誕生後正に百年目にあたることの年「一月十二日瑞典の首都ストックホルムに生る。父カール・オスカル(その母親は獨逸人)は富裕なる商人なりしも、その頃恰も家運衰へ、且つ彼は第四子なりし故、最初より所謂歡迎せられざる子として生を享けたり。

一八五六年、七歳にして初めて入學す。

一八六二年、十三歳にして、もと彼の家の女中なりし母親を失ふ。爾來とかく繼母と折合はず。

一八六七年、十八歳にしてウプサラ大學に入りしも、一學期の後學費の缺乏と共に歸郷して、小學教師の職に就く。

一八六八年、ふと醫學に興味を感じて、再びウプサラに赴き、自然科學の各部門を熱心に研究す。

一八六九年、春醫學研究を斷念し、俳優たらんとして一度舞臺に立つ。恰もこの頃、創作衝動と詩人としての自覺は突如彼の裡に目ざめ、喜劇『自由思想家』等成る。

一八七〇年、三度ウプサラの學生々活に入りて、文科的の講義を聴く。韻文「一幕物『ローマにて』上演せらる。

一八七一年、悲劇『平和無き者』上演の結果、國王カール十

五世の寵惑に預り、學資金を下賜せらる。

一八七二年、學を廢して故郷に歸る。初期の作中最も重要な五幕の史劇『メステル・オーロヴ』成る。その後新聞雜誌の寄稿家、保險新聞の編輯者、或は電信技手等の職業に轉々して、彼にとつては「堪へ難き窮乏と汚辱の時代」なりしも、またベルンといふ料理屋の「赤い部屋」を俱樂部とするボヘミアンの藝術家連との交遊の間に、將來作家として立つに必要な素地を作れり。

一八七四年、二十五歳の秋王室圖書館の助手に採用せらるるに至つて漸く生活の安定を見出せり(在職八年)。その後數年間は、文化史その他の學術研究に没頭す。

一八七五年、二十六歳の初夏の頃、『痴人の告白』の女主人公たるシリ・フォン・エッセン(當時ヴランゲル男爵夫人)と相識るに及んで、忽ち敬虔にして官能的なる戀愛に落つ。

一八七七年、二十八歳の十二月、男爵と離婚せる彼女と正式の結婚式を舉ぐ。自ら體驗せるウプサラの學生々活を清新なる筆觸を以て如實にスケッチせる短篇集成る。

一八七九年、自傳的長篇小説『赤い部屋』によつて一躍瑞典に於ける新しきリアリズムの代表者「の名を博す。

一八八〇年、中世紀を舞臺とする喜劇『組合の秘密』。

一八八一年、浪漫的特色を發揮せる童話劇『幸運兒ペール

の旅』。

一八八二年、女優となれる彼の妻のために書き下せる史劇『騎士ベンクトの妻』。現代社會の種々相に對する辛辣なる諷刺の書『新帝國』出で、非難攻撃の的となる。

一八八三年、秋妻と共に故國を去り、爾來六年間佛、瑞西、伊、獨、丁抹等の各國に轉々して放浪の客となる。

一八八四年、佛蘭西より瑞西に移り、ジュネーヴ湖畔の明媚なる風光に、ルソーの影響を受けること多かりき。現代の結婚生活の種々相を描寫せる十二の短篇を集めたる『結婚物語』第一部出づるや、その卷頭論文に於て、當時流行の輕浮なる婦人崇拜及び婦人解放運動に痛棒を喰はしたる爲め、男性的及び中性的なる婦人連の激怒を招き、たま／＼その一短篇の中に神を冒瀆する語句有りしを口實として起訴せられ、二年間の刑を求められしも、自ら本國の法廷に立つて辯護して危く罪を免れたり。

一八八五年、『結婚物語』の第二部を佛文にて書く。

一八八六年、大規模に企てられたる自叙傳の最初の部分『女中の子——或る魂の發展』に於て、一切の暗黒面を暴露して憚らざる告白者としての彼の眞面目を發揮す。

一八八七年、自然主義的悲劇として有名なる『父親』。九月『痴人の告白』に着手、翌年三月丁抹に於て脱稿。

一八八八年、『令嬢シュリー』、『仲間同士』、『債鬼』等、多くは彼自身の結婚悲劇より生れ出でたる數篇の自然主義的戯曲。この頃暫時、發狂直前のニーチェと文通して互に共鳴し、二年後に成りし長篇小説『大洋のほとり』には、ニーチェ流の超人型の人物を主人公となせり。

一八八九年、四十歳の春久しぶりにて故郷に歸る。詩人としての名聲は昔日に幾倍して今や世界的となりしも、彼を憎惡し嫉視する輩も亦故國に於ては昔に數倍せり。

一八九一年、十二年間の結婚生活の後に正式に離婚し、三人の子供を母親と共に彼女の故國芬蘭に送り返して後、長く絶ち難き愛着に悩んで幾度か自殺をさへ計れり。

一八九二年、秋再び故國を去つて伯林に居を定む。

一八九三年、四十四歳の春、彼より二十歳も若き奧國の閨秀畫家フリーダ・ウールと婚約を結び、後二人の間に一女兒を儲けしが、早くもその翌年にはこの第二の結婚も破綻に終れり。その後自傳『地獄』に於て取扱はれたる試練と煩悶と恐怖の闇黒時代が始まり、彼の魂は極度の不安に呻吟してあらゆる迫害妄想に悩まされ、發狂か自殺かの危機に瀕せる事幾度なるを知らず。

一八九七年、慘憺たる魂の受難史『地獄』及び『傳説』。

一八九八年、三部劇『ダマスクスへ』の第一部、第二部成